

論文審査の要旨

報告番号	甲 第 3177 号	氏 名	高橋 聖也
論文審査担当者	主査 本田一穂 教授 副査 砂川正隆 教授 副査 泉崎雅彦 教授		
<p>(論文審査の要旨)</p> <p>分枝粥腫病は、穿通枝動脈の重度狭窄を伴う脳梗塞であり、進行性の神経学的症状増悪を引き起こす。同じ穿通枝梗塞である進行性の乏しいラクナ梗塞と誤診すると、治療介入が遅れ神経予後を悪化させる。今回高橋らは、病変拡大と症状進行予測のため、分枝粥腫病を疑う患者の MRI や頸動脈超音波を用い、発症後の椎骨動脈の血行力学的特性を調査した。</p> <p>2014 年 4 月から 2019 年 3 月までに昭和大学藤が丘病院脳神経内科に入院した橋分枝粥腫病の 44 人の患者を対象とし、臨床的特性を収集した。また、MRI を用いて最大橋梗塞面積を、頸動脈超音波を用いて椎骨動脈の直径、流速および流量を測定した。</p> <p>対象患者を最大橋梗塞面積の中央値で分け、両群を比較した。年齢や性別、既往症などの臨床的因子は両群間で類似した。一方、左右の椎骨動脈血流量や血流速度は、最大橋梗塞面積の大きい群で大幅に低下していた。</p> <p>本研究により椎骨動脈の血行力学的悪化が、橋分枝粥腫病に広範な虚血を引き起こす可能性があり、頸動脈超音波を用いた椎骨動脈評価が進行予測因子となり得ると考えられた。</p> <p>本論文は新しい知見を得ており、学術上価値のあるものとして、学位論文に値すると判断した。</p> <p>論文題名： Prognostic evaluation of branch atheromatous disease in the pons using carotid artery ultrasonography (頸動脈超音波を用いた橋の分枝粥腫病の予後評価)</p> <p>掲載雑誌名：Journal of Stroke & Cerebrovascular Diseases Vol.29 , No.7 , 2020 年掲載予定</p>			

(主査が記載、500 字以内)